松岡勲の映画 or 読書案内（５）

ガザ紛争の正体：暴走するイスラエル極右思想と修正シオニズム

宮 田　律 著（平凡社新書）

昨年10月7日、ハマス主導のガザのパレスチナ人戦闘員による越境奇襲攻撃に対して、イスラエルによる未曾有のジェノサイド攻撃が始まった。これまでの死者数は3万4千人を越え、死者のうち、 女性と子ども、高齢者の割合が実に70％を上回っている。宮田律著『ガザ戦争の正体　暴走するイスラエル極右思想と修正シオニズム』（平凡社新書）を読んだ。この本はイスラエルの極右思想であるシオニズム思想がパレスチナ人の抹消をその目的にし、ナチズムと同じ基本構造をもっていることを詳細に展開していて、その事実に大変驚いた。冒頭に「ポグロムやナチスの強制収容の記憶は、イスラエルの学校で繰り返えし教えられる。そのため、アラブ人は我々がユダヤ人だから攻撃するという考えが浸透するようになり、それがパレスチナ人に対する大規模な暴力を肯定するムードになっている。」という。（22ページ）

パレスチナ人排除をねらうイスラエル極右思想

イスラエル極右思想と修正シオニズムについて、以下いくつか本書の叙述を紹介する。イスラエルのヨアヴ・ガラント国防相は 2023 年 10 月 9 日、「ガザ地区を「完全に包囲する」と述べ、さらに「電気、食料、水、ガスのすべてを止める」、「私たちは動物と戦っており、それに見合った行動を取っている」とも語った。（中略）また、イスラエルの軍報道官がガザ住民に対してエジプトに逃れるよう呼びかけたことが報じられた。これらの報道のように「イスラエル極右はエレツ・イスラエル（現在のイスラエルとパレスチナを合わせた地域）から修正シオニズムの考えに従ってパレスチナ人を追放することを訴えている。」（43 ページ）

『ガザ紛争の正体：
暴走するイスラエル極右思想
と修正シオニズム』

宮田 律（著）　2024/4/5

（平凡社新書）

（集英社新書）

内藤正典・三牧聖子

『自壊する欧米：
ガザ危機が問う
ダブルスタンダード』

イスラエルで修正シオニズムが支持される背景

イスラエルの極右思想（カハネ主義）はアメリカで生まれたもので、メイル・カハネ（1932 年～90 年）のイデオロギーを背景としている。「カハネは執拗にアラブ人（パレスチナ人）をエレツ・イスラエルから追放することを訴えていく。彼は、イスラエルはその市民権をユダヤ人だけに限定すべきで、公的生活においては、ユダヤ法（ハラム）を採用すべきだと説いた。（中略）またユダヤ人と非ユダヤ人との通婚を認めないことを主張した。（中略）カハネの支持者たちは、ユダヤの立法である『トラー』を守り、ユダヤ人以外の民族を徹底的に排斥することが、ユダヤ国家の統合を促進、強化するものと考えた。」（76 ページ）

「イスラエルの極右勢力を支持するのはイスラエルの周縁部分の社会・経済インフラが整備されていない貧しい地域に住む人が多く、そういう意味でも彼らより下の生活状態を余儀なくされているイスラエル国内のアラブ人やパレスチナ占領地域のアラブ人たちの存在は、彼らにある種の優越感を与えることになっている。」（71 ページ）

「ところが、カハネの極端な訴えは当初から若年層の支持を得ていた。（中略）こうしたカハネに対する支持の広がりは『カハネ・シンドローム』と呼ばれるようになり、カハネを支持する若者たちの活動は『カハネ・フーリガン』とも形容される暴力的形態をとっていった。その背景には度重なる戦争とインティファーダ（蜂起）に接することによってイスラエルの若者たちのやり場のない閉塞感が募っていたことがある」（77 ページ）

自壊する欧米：ガザ危機が問うダブルスタンダード

このようなイスラエルにおける極右思想の進行と今回のガザ戦争とは表裏一体である。とにかく知らないことが満載されている本なので、読むことをおすすめする。さらにもう一冊。これもガザ戦争に関する本で、内藤正典・三牧聖子著『自壊する欧米：ガザ危機が問うダブルスタンダード』（集英社新書）だ。「自由・平等・博愛そして人権」をうたいながら、イスラエルへの支援を止めず、民族浄化を黙認し、イスラエル批判を封じる欧米のダブルスタンダードを中東、欧州移民社会の研究者（内藤正典）とアメリカ政治、外交の研究者（三牧聖子）が根底的に告発する。世界秩序の行方とあるべき日本の立ち位置について考察する興味深い本である。